

事例 11 パーマカルチャーとトランジション・タウンによるコミュニティづくり（神奈川県旧藤野町）

概要

旧藤野町は、1996年にパーマカルチャー・センター・ジャパンが設立され、日本におけるパーマカルチャーの発信地となっている。センターでは、日本の風土に適したパーマカルチャーの実践を試みており、パーマカルチャー講座を通して人材の育成にも力を入れている。センターで学んだことを藤野町で実践しようと移住してくる人も多い。また、2008年からは「トランジション・タウン運動」も始まり、自然と調和した持続可能なコミュニティづくりが進められている。

テーマ	パーマカルチャーやトランジション・タウンの考え方を取り入れたコミュニティ創造
主体・キーパーソン	パーマカルチャー・センター・ジャパン トランジション藤野
手法・技術	日本風土に適したパーマカルチャーの構築と普及 人材育成 脱石油社会に向けたコミュニティづくり

背景

相模原市藤野町は、神奈川県最北西端に位置し、都心からは車で約1時間の場所にある。町の中央部に相模湖があり、北と南を山々に囲まれ、環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類に指定されているギフチョウも生息する、自然豊かな町である。段々茶畑や土蔵のある町並みが広がり、「佐野川地区」は「にほんの里100選」（朝日新聞社／財団法人森林文化協会主催）にも選ばれている（2009年1月）。また、「芸術村構想」の一貫として、野外に彫刻作品が展示される等、芸術の町としても有名である。2007年3月に相模原市に編入され、2010年3月31日まで地域住民の意見を反映させるための地域自治区が設けられていた。しかし、2010年4月から相模原市が政令指定都市となったため、「藤野町」の名称は「相模原市緑区」に変更されている。

1996年にパーマカルチャー・センター・ジャパンが藤野町に設立された。

取り組みの内容

1. パーマカルチャー・センター・ジャパン

パーマカルチャーは、日本語で「持続可能な農的生活」と訳される。パーマネント（permanent 永久の）とアグリカルチャー（agriculture 農業）または、カルチャー（culture 文化）を合わせた言葉で、人間にとって持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系を指す。デザインとは、地形や気候、動植物、人間といった身の回りの多様な要素を観察し、

合理的に配置することによって、各々の特徴が十分に発揮できる環境を作ることの意味する。1970年代半ば、当時大学教員だったオーストラリアのビル・モリソン氏が提唱し、取り組みを始めた。

パーマカルチャー・センター・ジャパンは、「日本風土に適したパーマカルチャーの構築と普及による持続可能なライフスタイル及びまちづくりの提案と実践」を目的として、藤野町篠原集落に設立された。事務所として旧農家を改修し、自然素材や廃材の利用、効率的なエネルギー利用による建築、野菜等の生産を行う敷地整備を行っている。「人間が心地よく過ごせる場」をコンセプトに、ソーラー施設、貯水施設、浄水施設、コンポストトイレ、パン焼き釜、菜園、堆肥場等、様々な設備が整えられている。2004年からはNPO法人化し、パーマカルチャーによる環境づくりのコンサルティングも行っている。



生ごみを分解できる「みみずコンポスト

(出典：循環型社会研究会 HP)



緑あふれる実験農地

(出典：循環型社会研究会 HP)

農法として、有機農法と無農薬栽培が行われている。不耕起を基本に、農薬や化学肥料を使わず、窒素固定植物や除虫作用のある植物を混植するコンパニオンプランツ等を採用している。パーマカルチャーの実験農地では、あまり肥料を使わず、自然の力で作物を育てている。そのため、一度に作物が実ることはなく、作物の種類に応じた収穫時期に実を付ける。また、相性の良い組み合わせで作物を育てたり、果樹園では、地元の原生種と気候に適した果樹を栽培したりと、パーマカルチャーが実践されている。

1998年からは、パーマカルチャーの普及と人材育成を目的に、パーマカルチャーを学ぶ塾も開催している。パーマカルチャー・デザイナーになるための基本講座として、国際的にも認証されたパーマカルチャー・デザインコースがある。このコースでは、自然と人間、そして両者の関係についての理解を基礎に、持続可能な社会づくりを目指すパーマカルチャーの習得を目的としている。コース内容は、講義とデザインワーク、自然観察、パーマカルチャー施設の見学、簡単な建築や畑の実習である。講義では、倫理や原則にとどまらず、デザインを行っていくために欠かせない様々な分野の基本的知識や考え方、技術を学ぶ。デザインワークでは、デザインの基本的な考え方やプロセス、表現方法を学び、応用的・創造的な発展を実習する。10年以上の活動によって作られてきた農場や家屋において、持続可能な生活の体験を通し、自然や人と共に生きることを考えるコースになっている。2010年の夏季パーマカルチャー・デザインコースは、8月14日から13泊14日で行われる。その他に、パーマカルチャーの入門講座として、講義や農業体験、生活体験が

行える 1泊2日の体験講座、家族で参加する 2泊3日のパーマカルチャーファミリープログラム等がある。

2. トランジション藤野

トランジション・タウンとは、パーマカルチャーの講師だったイギリス人のロブ・ホプキンスによって考えられた運動である。ピークオイル問題と気候変動の危機の中で、市民の創意工夫や地域資源の活用により、「自然との共生を前提とした持続可能な社会経済システム」、「脱石油社会」へ移行することを目指している。地域レベルで焦点を当て、レジリエンス（「外界の大きな変化に対し、パニックを起こすことなく、また対処療法的にとりあえずその場をしのぐのでもなく、しなやかに対応する力」出典：NPO 法人トランジション・ジャパン HP）を高めることが重要とされている。2005年にイギリス南部デボン州トットネスで立ち上げられ、世界中に活動が広がっている。日本では、2008年に「トランジション・ジャパン」が設立され、トランジション運動を日本全国に広める活動を行っている。藤野、小金井、葉山、鎌倉、相模湖等で実践的な活動が始まっている。

2008年に、藤野町に移住して10年以下の3人の新住民をコアメンバーとして「トランジション藤野」が結成され、公式のトランジション・タウンとして活動を始めた。トランジション藤野を立ち上げた榎本秀剛氏は、「地域をベースにしている点、市民の力を活用する点、ピークオイルをきっかけに豊かな未来を目指す発想が魅力的（Think the EarthHPより）だ」と感じ、トランジション運動を始めた。

藤野では、鴨川の安房マネーの取り組みを参考に、地域通貨「よろづ屋」（単位は‘萬’）の取り組みを始めている。2010年5月には「よろづマーケット」が開催され、手作り雑貨や子供服、野菜、苗、種の販売、食べ物の持ち寄り、タロット占いやプチ整体等が行われた。メンバー以外の参加も可能で、新しい地域交流の機会を生み出している。

また、トランジション・藤野では、再生可能エネルギーや保存食、心と魂といったワークグループを作っている。例えば、心と魂のワークグループでは、車座になって自由に話す場と機会を設けている。目に見える活動だけでなく、生きる意味や価値観の変容も低炭素社会実現には欠かせないため、「内なるトランジション」も重視しているためだ。藤野では、このようなゆるやかなつながりの中で、地域通貨やワークグループによる活動を行い、自然の恵みを活かした、助け合える暮らし方を実践しようとしている。

3. 里山長屋暮らし～藤野プロジェクト

1つの敷地に棟続きの家を建て、4世帯8名が持続可能な暮らしを模索するプロジェクトが進んでいる。欧米のコハウジング（多世帯が交流を深めながら生活する共同コミュニティ住宅）を参考にしており、伝統的な木組みの2階建てに、それぞれの居住スペースと共有のコミュニティスペースを設け、隣同士が助け合える現代版の長屋暮らしを目指す。土地代を含めて1世帯あたり約2,500万円かかる見込みになっている。4世帯のうち、7人（子ども1人を除く全員）がパーマカルチャー・センター・ジャパンの講座受講生で、講師を

担当している人もいる。2010年10月の竣工を予定しており、完成後もエコハウスとして公開されることになっている。

コミュニティスペースには、リビング、大型の台所、洗濯場等が設けられる。それぞれの居住スペースにも台所等はあるが、1つの場所に集めることで省エネを可能にする。設計に関しては、地元産の木や土に還元する材料の使用、太陽熱集積装置による暖房、パッシブデザインによる蓄熱、雨水利用、エネルギー使用を抑えるための各世帯のスペースのコンパクト化、薪ストーブ、生ごみのコンポスト化による循環の仕組みが備えられ、環境に配慮した造りになっている。また、駅への送迎や買い物ではカーシェアリングを行なっている。コンセプトは家づくりではなく「暮らしづくり」で、プライバシーを保ちながらも、長屋で行われていた助け合いやお裾分けが行える日本のコミュニティを目指している。

長屋は、地元大工によって建設されているが、素人でも作業できる工程は居住予定者も参加して行っている。トランジション藤野とコラボレーションしており、これまでに土壁づくりの土づくりや竹小舞かき（土塗りの前段階にあたる、割って加工した竹を格子状に組み、縄で固定する作業）のワークショップが企画され、一般参加者も募集している。5～20人の参加があり、作業や食事を通して、交流が行われている。



竹小舞かけが終わった長屋づくり
(出典：里山長屋暮らし
～藤野プロジェクトHP)



基本設計時の完成模型
(出典：里山長屋暮らし
～藤野プロジェクトHP)

成果と課題

パーマカルチャー・センター・ジャパン事務局長の設楽清和氏は、伝統的に地域が持っている価値を再評価し、新しい知識と融合させることで、エココミュニティは自ずと生まれる、という。1つのコミュニティが出来上がっていれば、先人の知恵が伝わり、実践するだけで十分にエココミュニティは成熟する。太陽光パネルや水の再利用システム等をエココミュニティという言葉から連想するが、藤野の基本は「知恵の循環」だと話している。

毎日新聞の取材に対し、里山長屋暮らしの居住予定者でもあり、プロジェクト設計を担当する山田貴弘氏は、コモンハウスでパーティーやイベントを開けば地域のコミュニケーションの場にもなり、「人と人をつなぐ新しい仕組みづくり」にもなると話している。実際に、長屋づくりの手作業の工程はトランジション藤野とのコラボレーションによりワークショップ形式で行われており、一般の参加者を含め、交流が広がっている。

さらに山田氏は、里山長屋暮らし～藤野プロジェクトのメンバーがパーマカルチャーの

卒業生であることを「プロジェクトを進める上で、一番の強みになっている」(+design project 記事より)と話す。プロジェクトの進行は多数決ではなく、話し合いで進められる。また、メンバーが、フリーランスのライターやコンサルタントといった、家で仕事を行える職業であることも、プロジェクトがうまく進行する一つの要素と見られる。

居住予定者の1人は、戦争中の疎開先であり、多くの芸術家に移り住んだことから、藤野町は移住者に優しいと、地域の印象を語っている（「BE-PAL」2010年2月号）。既存住民の受け入れ体制があるからこそ、外部の人間や地元民の協力を得ながら、人との結びつきを見直し、新しい生活やコミュニティのあり方を示す実験的な取り組みが成り立っているものと考えられる。

[参考文献・資料]

- ・エコビレッジ国際会議 HP http://ecovi.begoodcafe.com/category/report/2010_3
- ・地球のココロ HP
<http://chikyu-no-cocolo.cocolog-nifty.com/life/2010/01/post-392e.html>
- ・藤野観光協会 HP <http://info-fujino.com/index.html>
- ・トランジション藤野 HP <http://blog.canpan.info/team-80/>
- ・循環ワーカー養成講座記録集（2006）P28 「パーマカルチャーとエココミュニティ神奈川県藤野町での試み」 設楽清和氏（パーマカルチャー・センター・ジャパン事務局長）
- ・Think the Earth HP
<http://www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily/report/2009/05/rpt-46.html#page-4>
- ・相模原市 HP <http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/index.html>
- ・里山長屋暮らし～藤野プロジェクト HP <http://blog.canpan.info/nagaya/>
- ・トランジション・ジャパン HP <http://www.transition-japan.net/>
- ・パーマカルチャー・センター・ジャパン HP <http://www.pccj.net/>
- ・greenz.jp HP http://greenz.jp/2010/03/23/satoyama_nagaya/
- ・「毎日新聞」2010年2月24日付朝刊
- ・「BE-PAL」2010年2月号
- ・+design project <http://www.h-plus-design.com/pov/cases/15.html>
- ・循環型社会環境研究所 HP
http://www.nord-ise.com/junkan/fieldwork/Fieldwork_PCCJ_060830.html